

島木健作と堀坂山行

— 朝倉菊雄と梅川文男における転向／非転向 —

尾西 康充

序

神戸で梅川文男は三・一五事件（日本共産党員全国一斉検挙事件）に遭遇する。浜松楽器事件下獄者送別会に出席するために労働農民党神戸支部事務所に出かけたところを官憲によって検束されたのであった。当時、梅川が所属していた労働農民党と日本農民組合（日農）とは、農民運動の左翼に属するグループであり、いずれも一九二八（昭和三）年二月二〇日、普通選挙法にもとづく最初の衆議院議員選挙に際して公然と姿を現した日本共産党によって指導されていた。選挙活動では、「我等に食と仕事を与へよ！／われらに土地と自由を与へよ！／無産者の代表に投票せよ！」（労働農民党）などのスローガンを掲げて大いに氣勢を上げた。当時、梅川は労働農民党神戸支部書記長、日農兵庫県連合会淡路出張所書記を兼任していた。

それから一ヶ月も経たない内に、捜査をカムフラージュするため選挙違反の取締期間が選ばれて三・一五事件が発生した。兵庫県内では、内務省から派遣された事務官を中心に神戸地方裁判所の予審判事六名および検事二〇名が指揮を取った。私服警官一八〇名が動員されて十数台のトラックに分乗、その日だけで六四名を検挙、最終的に

は一八〇名余の人々が党籍の有無を問わず検挙され厳しい取調を受けた。その内、神戸の党委員会を構成していた板野勝次、三宅右市、白土五郎、奥田宗太郎、広畑惣太郎の五名を含む三六名が治安維持法違反の容疑で起訴に及んだ。党籍を持っていた梅川もそのなかの一人であった。神戸では予審が終結するまで新聞発表が差し止められて、九月八日午後一時になってようやく解禁された。大阪朝日新聞（神戸版）二八年九月九日朝刊には、「一味の素性」として被告の面々を紹介した記事が掲載されており、梅川はつぎのように報道されている。

被告文男は農民運動をつゞけ、淡路における左傾指導者で、二月施行された選挙には兵庫県第二区から立つた労働党近内金光のために運動し、勝治（板野勝次）から宣伝隊を組織すべく命ぜられたが警官の取締りにあひ、ついで送付して来た伝単も撒布の目的を遂げなかつたが、相被告唯一（高丸唯一）ととも淡路に農村細胞準備会を組織して党勢の拡張をはからんとしたものの^一

（引用文の括弧内は著者による註）

淡路島の三原郡賀集村を拠点に、マルクス主義にもとづく急進的な農民運動を展開していた梅川は、衆議院議員選挙運動中の二月初旬、板野勝次に勧められて党籍を得て、日農顧問弁護士であった近内金光候補の応援に全力を注いでいた。しかし官憲による選挙妨害が激しく、選挙戦がスタートした二月一日、その日の内に選挙事務所の事務長を始め梅川などの運動員多数が検束されてしまう。その理由を警官に問いただしても「治安二害アリ」の一点張りであった。²⁾

党员としての活動歴は一ヶ月程度のものであったが、党籍を持つていたために三・一五事件の裁判では刑が重く、懲役五年の一審判決を受ける。この判決に不服を唱え控訴、しかし大阪控訴院の二審判決でも刑期が短縮されず懲役五年の実刑が確定する。控訴審を終えた梅川が下獄したのは、堺市田出井町への移転工事が終わり三・一五事件の二日後に落成式が行われたばかりの大阪刑務所であった。一九一八(大正七)年から一〇年間、二〇六万円もの予算を投じて行われた刑務所の移転改築は、急速に増加した思想犯の入所に対応するための措置であった。一〇九、四三九坪の敷地内に収容定員三、一五五名、エレベーター付き四階建という最新最大の刑務所が建てられた。

大阪刑務所で服役した梅川の斜め向かいの獄室には、朝倉菊雄がいた。最も戦闘的な農民組合として謳われた日農香川県連合会書記の朝倉とは度々、日農全国大会などで同席したことがあり、独房に収容されていても梅川にはそこにいるのが朝倉であることが認識された。朝倉のペンネームは島木健作——徳永直や森山啓の推薦によって「文学評論」第一巻第二号(三四年四月号)に掲載された島木の小説「癩」は、作品が発表されると、直ちに武田麟太郎や勝本清一郎が賞賛の批

評を書き、島木は新進作家として一躍脚光を浴びることになった。ハensen病患者が不治の病と闘いながらもなお非転向を堅持しているという不撓の姿勢が読者の広い共感を集めたのだが、島木が描いた獄風景は、梅川にとつて自ら体験した世界でもあった。非転向を貫き刑期満了まで獄に留め置かれていた梅川が、釈放後、どのように島木の小説を読んだのか、戦後になって発表した「島木健作の思い出——「癩」のもでるなど——」(「季刊関西派」、四九年七月、竹書房)を取り上げながら考察してみたい。

梅川が島木に対して「彼の言動や態度や風貌のどこからも文学の「ぶ」の字の匂いも嗅ぎ出せなかつた」と感じた記憶は、島木が「作家として転向したのではなく、転向して作家になつた」³⁾ことに結びついている。当時、地方に在住していた組合員には、現実離れた行動を命令する党中央部への批判があり、また多くの作家には、個性を軽視した画一的なプロレタリア小説ばかりが制作されていたことに不満があつたことなどを考えるならば、地方で農民運動の最前線で闘い、さらに苦獄の時間を経験することを通じて自己意識を形成した梅川と島木との間には、転向／非転向の規準を越えて共有される作家としての価値観が存在していたことが指摘できると考えられる。

一

「癩」の主人公・太田二郎は独房で一日に三、〇〇〇枚の封筒貼りをしてきた。太田は肺病のために仮釈放されるのだが、梅川は刑期満了までの五年間獄に繋がれており、「癩」の主人公より、私の方がは

るかに年期をいれた封筒はりの熟練工だったようだ」と往時を回想している。この一文が冒頭部分に置かれた「島木健作の思い出」は戦後に書かれた評論のため、梅川の記憶違いの箇所もいくつか見られる。大阪刑務所から釈放された一九三三（昭和八）年に島木の「癩」が発表されたときも書いているが、実際は、翌年四月に発表された作品である。そのような単純な記憶違いもあるのだが、それ以上に、作品を初めて読んだときの興奮が生き生きと記されているのが面白い。

くいつく様によみながら、ぶるく興奮した。この快感は、じつに久しぶりのものだった。それは単に、そこに描かれている生活のなじみ深さからくるばかりでなくまた異常な「癩」患者とゆう取材の特異さからのみくるのでもなかつた。作品それ自体が傑っていたからである。これは「戦旗」時代の数多くの「プロレタリア」小説とちがつて、ほんものだと唸つた。

読み終つて、ふつふつ湧き上つてくる興奮のはけ口にこまつた。

「戦旗」時代に数多く書かれたプロレタリア小説と「癩」とが違つているという梅川の指摘は、作品の掲載に当たつて徳永が、党指導にもとづいて芸術のボルシェビキ化を目指した日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）員たちとは異なつて、島木が「おそろしく『特異性』のある『受身のふかい作家』」であると評したことに通じている。

そもそも、ナルプ解散とほぼ同時に創刊された「文学評論」は、ナルプ正統派の政治主義的偏向を批判した作家たちの分派活動から創られ

た雑誌であつた。政治的な主題の「積極性」のある作品を創作するのが至上命題とされた時代に、転向心理を描く島木のような「受身のふかい作家」が登場したことは、梅川に「ほんものだ」と唸らせるに足るほどの刺激に満ちた事件であつた。

さらに梅川はつぎのように記している。

癩患者のもてるには心あたりがあつた。

しかし、片方の肺患者である。これにも心あたりはあつた。だが、まさかあの男が、とどうにも裁断をくだしかねた。

すでに知られているようにハンセン病患者のモデルは三宅右市である。彼は一九八九（明治二二）年八月一五日生まれ、本籍は岡山県御津郡牧山村大字北野一五八番地にある。明治大学法学部を卒業した後、大阪の此花区四貫島に来て労働組合の活動に従事していた。当時の四貫島は、住友金属を始めとして西六社と呼ばれた重化学工業の大工場が建ち並び、空は煤煙に覆われて暗く正月の三カ日以外、青空の見える日がほとんどなかつた。四貫島の下宿で同居したことがある岸本邦己氏によれば、「ちようどそのころ島木健作は日本農民組合本部の書記をしていたが『労働組合の同志中村が訪ねてきた。じつは今度クートベから同志がひとり帰つてきたので君の四貫島の間借りにその男を泊めてやつてくれ』と頼まれたので、短いあいだ同居していたがやがてその男は神戸に移つた」。当時、日農総本部は大阪の此花区江成町にあり、総本部の書記を務めていた島木が、中村という変名を使つた三宅を岸本の下宿に連れてきたという。クートベ（東洋勤労者共

産主義大学) 帰りというのは島木の勘違いであり、地下活動を余儀なくされていた党関係者に関する情報は組織上部の者しか知らず、運動の現場においては混乱していたのであろう。また「癩」のなかでは、三・一五事件ではなく八月になっているが、やはり三・一五事件で檢舉されており、労働農民党中央執行委員および同党兵庫県連合会常任委員を務めていた。

さらに三宅に関する特筆すべき事項として、岸本はつぎのような事実を伝えている。三六年八月一三日、岡山県の国立ハンセン病療養所・長島愛生園で、患者の待遇改善を要求する騒擾事件が発生、ハンストなどの方法を用いて一ヶ月以上闘いは続けられたが、官憲の弾圧と病院側の懐柔策によつて終息させられる。岸本によれば、このときの指導者が三宅であったという。事件を引き起こした責任を取らされて、三宅は香川県木田郡庵治町大島の青松園に転院させられる。人間が生きる上で最低限保障されなければならない権利を求めて、釈放後も彼は闘い続けたのである。その意味において、進んで行った道こそ違えども、創作上のモデルとされた宮井進一と同じように、彼もまた非転向を買いた人であった。

ここで梅川の文章に戻ろう。梅川は、肺病患者の方には心当たりがあつたものの、「まさかあの男が」という気持ちから裁断を下しかねた、と書いている。それはなぜか――。彼が抱いていた島木の印象は冷たく、「島木健作と朝倉菊雄の二枚の映像をあわせ、すかしてみると、どうにも朝倉が冷めたくつて、とげの様に神経質で、こむずかしくびつたりあわない」のである。それと同時に「いまの朝倉には小説など落ちついて書いている時間的余裕もなからう」と考えたからであ

る。梅川は「島木健作の思い出」のなかで、つぎのようなエピソードを伝えている。二七年二月二〇日から三日間、日農第六回大会が大坂天王寺公会堂で開催された。その二日目の夜、各府県連合会の書記会議があり、そこで梅川は島木と同席する。

このとき私の横に、痩せて神経質に肩いからせ、冷たく非妥協的で、眞面目な面構えの、目だけ熱情的に光らせた廿四、五の同志がいた。自己紹介の時、香川県連合会の書記、朝倉菊雄と名乗つた。

島木は第一印象から悪い。だが、当時香川県連合会は二万人以上の組合員を擁する戦闘的連合会として他府県を圧倒し、あらゆる会合で絶大な発言力を持つていた。書記会議の席上、島木は公式的で融通の効かない発言をする。それに対して梅川が本音で発言した。島木は慌てて自らの意見を修正するのだが、その後の討議でも理路整然と付け入る隙のない発言を繰り返し、周囲の者たちに「自信以上の傲慢さ」を印象付けた。それは、高見順が島木に対して「無愛想というより、これでよく農民運動ができたものだと思ふに思われるほどの狷介さ」を感じていたのに通じよう。

また、梅川が「いまの朝倉には小説など落ちついて書いている時間的余裕もなからう」と考えていたのは注意すべき点である。なぜなら、島木は「過去の自分の道に誤謬のあつたことを認め、再び政治運動に携はる意志はない」と転向を声明し仮釈放されたのだが、出所後、政治運動に復帰していたという確信があり、そのために小説を書く余裕

などなかつたはずだと梅川が考えていたからである。島木にとって非転向の同志・宮井進一は、島木が出所後、党の機関誌「インター」を配達していたことが警察に発覚して本富士署で酷い拷問を受けたこと、彼を官憲に売り渡したのが党中央委員の大泉兼蔵というスパイであつたことを明かしている。⁷⁾そこでつぎに梅川は、なぜ島木が政治運動に復帰していたと考えていたのか、その論拠を示してみよう。

二

左右の路線対立から全日本農民組合同盟（全日農同盟）と全日本農民組合（全日農）、日農との三派に分かれていた農民組合は、三・一五事件によつて幹部の大半が戦線から奪われると、組織の建て直しのために全日農と日農とが合同、全国農民組合（全農）を結成した。二年五月二七日に結成大会を開催、会長には杉山元治郎を選出した。これによつて農民組合は短期間ながらも統一を維持し、「昭和恐慌下の農民運動の第二次高揚を迎えて農民組合の活動も活発化⁸⁾した。

しかし、大山郁夫が合法的左翼無産政党として新労農党の結成を呼びかけると、それは前衛政党の必要を否定するものであるとして旧労働農民党支持者たちが反対した。労働組合や農民組合のなかに「革命的反対派」を形成することで社会民主主義グループに打撃を与えよ、とする赤色労働組合インターナショナル（プロフィンテルン）のロフフスキー路線に従う形で、彼らは分派活動を展開、次第に勢力を結集して行つた。全農総本部から極左偏向の理由で除名されたメンバーは臨時書記局を設けて「全農改革労働政党政支持強制反対全国会議」、す

なわち全農全国会議派（全農全会派）を立ち上げた。宮城、山梨、茨城、富山、愛知、長野、大阪、兵庫、千葉、三重の一〇府県連合会および関東、北陸地方協議会、全農総本部青年部など総本部派から除名された組織を中心に、三一年八月一五、一六日、第一回全国代表者会議を開催した。全農内の革命的反対派の立場を取りながら争議の現場では「農民委員会」運動方針、すなわち小作人を主体とした闘争から貧農を主体とした闘争へと転換し、農村内のプロレタリアートを結集した農民委員会を立ち上げることで農民運動の階級的な性格を鮮明するという戦術が提起された。ちなみに初代委員長として選出されたのは、三重県の上田音市であつた。

梅川と同じ松阪市に生まれた上田は、全国水平社が創立される前年の二一年四月、北村庄太郎や中里喜行らと共に徹真同志社を結成、全国に先駆けて被差別部落の解放運動を始めた運動家である。労働運動、農民運動、水平社運動の連携を積極的に進め、農村労働者を結集しながら失業者同盟を組織するなど、差別糾弾闘争を階級闘争として捉え直すことで勢力の拡大強化を図つていた。全国水平社（全水）中央常任委員会（三三年三月二日）で、上田は三重県連を代表して、「部落労働大衆が、労働者農民との強力なる階級的結合なくして部落民の完全なる解放はあり得ない」という立場から「水平社の組織と闘争機能を余すところなく階級組織の中へ解消」させる「全水解消意見書」を提出した。上田を始め総本部派から除名された河合秀夫などの指導もあつて三重県の農民運動はつねに左派の路線を進んでいたのである。

三二年九月、日本共産党の党オルグ・梶田茂穂が三重県を訪れ、全

農全会三重県評議会常任書記に就任する。それ以来、党と強い結びつきであった農民組合や労働組合が県内で急速に再組織化される。具体的には全農全会派と日本労働組合全国協議会（全協）であった。だが県特高課はその動きを察知、三三年三月一三日早晩、一斉検挙に乗り出した。検挙された者は津、大阪、宇治山田、四日市の四都市にわたって一四五名もの数に上った。約九ヶ月に及ぶ新聞記事差し止めが解禁された後、「伊勢新聞」は三・一三事件について、つぎのように伝えている。

県下四市の赤化分子百四十五名検挙

三月十三日未明の捕物陣　うち七名起訴さる

本県特高課が本年三月十三日、県下津市、大阪、宇治山田、四日市の四都市に巢食ふ共産党狩りは県下一斉に県特高課並びに管轄警察署総動員の下に鉄帽鉄衣の決死隊を組織し、十三日深更より未明にかけて各グループの根城を襲撃し一網打尽的に百四十五名の党関係者総検挙を行ひ、その後各署に留置すると共に党の運動関係に就て県特高課並に検事局の厳正なる取調べを行ひつゝあつたが、その中次の通り七名を起訴するに決定し一段落した――

〔伊勢新聞〕夕刊、三三年一月二二日

普及や学習、組織強化のために約三〇〇部増刷されていた「三二年テーゼ」や「赤旗」が徹しい捜査によつて多数発見され、県警を愕然

とさせた。治安維持法違反の容疑で最終的に起訴にまで及んだ者として、梶田を含め坂下善也や小椋重昌、木村繁夫、国分精一、岩瀬仲蔵らの名前が「特高月報」に挙げられている。この弾圧によつて県内の各組合はまさに壊滅的な打撃を受けたのである。

この三・一三事件は、大阪刑務所から釈放されて帰郷したばかりの梅川をも襲つた。出獄後まだ一ヵ月しか経っていないため家宅搜索を受けただけで済んだが、静養して体力を回復させる暇もなく、組織を再建するために奔走しなければならなかつた。やや長くなるが、再び「島木健作の思い出」から引用しよう。

足かけ六年、運動から置いてけぼりをくい、情勢を把握しかねていた私は、その間にでた新聞、雑誌の膨大な綴りこみを繰つたり、同志から話をきゝながら、六年の空白をうめ、六年を追跡するのに懸命だつた。半年は、まず静養と、肚をきめていた私も、目の前で組織が破壊され、崩れてゆくのを、ぢつと見ているわけにはゆかなかつた。疲労しきつていた身体を、いたわつてばかりもおれなかつた。すわらされつゞけて来たため、少し歩けば、がくがくして膝をつきそうなほどに弱つていた。しかし、やらねばならなかつた。検挙もれの同志と、また引つぱられるのを覚悟で村々をまわつて、おびえている組合員を励まし、支部組織の整備と、連合会の再建に動きはじめた。

動きはじめた私のところに、中央部からこつそり使者が来た。上京して、中央部の仕事をしろ、とゆうのである。私は、ことわつた。勇気をだしてことわつた。

目の前で組織が破壊されるのを黙って見ている訳には行かなかつた、とあるのは梅川の真情であつたに違いない。農民組合や労働組合の指導者が根こそぎ検挙された後、梅川は松阪市の日野町二丁目や東岸江、西岸江、花岡に住んでいた被差別部落の人々と協力して組織の再建を始めた。三重県の社会運動研究者・大山峻峰氏によれば、「三・一三の大弾圧のなから、萌え出てくる若芽のように起ちあがつて、組織を再建し得たのも、松阪地方の集団的な部落の人々の組織的な力によるものであつた」と論じている。出獄後、梅川が再び運動に復帰しようとしたのは島木の場合と同じであつた。だが、「中央部」が上京して働くように、と要請したのを梅川は拒否している。体力がまだ回復していないことや県の農民組織の再建が急務であつたことなどが表面上の理由だが、「中央部」には警視庁のスパイが潜入していて上京後一週間で経たない内に逮捕される、といわれていたような「中央部への不信」が本當の理由であつた。このとき三重県ではすでに、農民の日常闘争を革命的な方向に導き、貧農を主体とした農民委員会を通じて革命的組織を結集するという全農全会派の高度に前衛的な行動綱領では、とても運動の大衆化は望めない、それは極左的偏向に満ちているとする批判が起こつていた。¹⁰

島木がスパイ大泉に売り渡されたことを考えれば、梅川の判断は結果的には正しかつたといえよう。だが拒否の姿勢を示した梅川の許に「中央部」から説得役の幹部が来るという連絡がある。その部分をつぎに引用しよう。

こうゆうどうゆうような事情のなかで、それは「頼」の登載された文学評論が出るすこし前のこと、私はひまを作つてKさん（河合秀夫）のいる静岡市にゆき、一週間ほど滞在した。静岡につきなり私は、全会派の中央部から、口説き役が来ること。その口説き役が他ならぬ朝倉菊雄であることをきかされた。朝倉君なら懐しい。要件はともかくとして、ゆつくり懇談してみよう、と待つた。

朝倉菊雄は、実兄の経営する赤門前の、社会科学専門の古本屋、島崎書院にいて商売を手伝つてゐるとのことだつた。

こゝではじめて私は、彼が、その進度は別として、全会派の仕事に秘密に参加していることを知つた。そして彼が参加している位なら全会派の中央部は充分信用してもよいと考えた。ところが待つていた彼は来なくて、他の同志が来た。朝倉君は、また咯血して、寝てゐるとのことだつた。私はがっかりした。

（引用文の括弧内は著者による註）

説得役の幹部とは、他ならぬ島木であつたのである。兄八郎の許に寄寓して古書店の名番頭を務めていたのは確かな事実である。だが三年、彼が全会派に復帰してゐたかどうか、梅川の話を裏付ける証拠はない。梅川をおびき出そうとして島木の名前が騙られたのかも知れない。しかし右のような出来事から梅川は島木が政治運動に復帰してゐたと考えており、「あぶない全会派の地下組織の仕事に関与して

る多忙の身で、ゆつくり、これほどのものは書けないと思われた」のである。梅川にとつて、これが「癩」の作者島木健作と朝倉菊雄が一致しない理由であった。

三

これまで島木の「癩」に関連した事柄に論及してきた。島木が新進作家として脚光を浴びた「癩」は、それに続いて発表された「盲目」（『中央公論』臨時増刊、三四年七月）、「苦悶」（『中央公論』一〇月）、「医者」（『文学評論』第一巻第九号、十一月）、そして書き下ろしの短編「転落」と共に単行本『獄』に所収されて、一九三四年一〇月、「文学評論」の出版社と同じナウカ社から発行された。他方、梅川も自らの獄中体験を素材にした小説「老人」を郷里の文芸雑誌「三重文学」に二回に分けて発表する（三六年二月号及び四月号）。作品の性質、評価ともに大きな差はあるのだが、島木、梅川共にマルクス主義者の獄中心理を描いた小説を創作している。つぎにそれぞれの作品を検証してみよう。

まず島木の「癩」——大都市に近い町の高い丘の上にある新築後間もない刑務所に思想犯の太田二郎が服役している。目に映るのは「灰色の壁と鉄格子の窓を通して見る空の色」だけであるが、耳を澄ますと、様々な音が聞こえてくる。廊下を通る男たちの草履の音や、役人の靴音と佩刀の音、建物の外から聞こえてくる雀の声……、「だが、何にも増して彼が心をひかれ、そしてそののみが唯一の力とも慰めともなつたところのものは、やはり人間の声であり、同志たちの声であ

つた」。懲役五年、節を曲げず人間らしさを保ち続けて生きようと心に誓う。ところがある日突然、大きな血塊を吐瀉、肺病と診断され隔離病舎の独房に移される。実はそこはハンセン病患者を収容していた病舎で「社会から隔離され忘れられてゐる牢獄のなかにあつて、更に隔離され全く忘れ去られてゐる世界」であつた。患者たちの壮絶な欲望を目撃したり、発病した現実を受け入れられず錯乱する姿に接したりすることで、太田の胸中に「いつしか自分でも捕捉に苦しむ得体の知れない暗いかげ」がざざし始め、ついに「冷酷な現実の重圧」に打ちひしがれて強度の精神衰弱に見舞われる。共産主義者としての彼はまだ若いインテリで、「實際生活の苦汁をなめつくし、その真只中から自分の確信を鍛え上げた」訳ではなく、「一度たとへやうもない複雑な、そして冷酷な人生の苦味につき当たると、自分の抱いてゐた思想は全く無力なものになり終わり、現実の重圧に只押しつぶされさうな哀れな自己をのみ感じてくる」のであつた。

ところが、ある日、昔の同志・岡田良造と出会う。検挙前、農民組合本部書記をしていた太田は、遠縁に当たる親戚の家の部屋を借りて四貫島に住んでいた。しばらくそこで岡田と寝食を共にし、太田が地方に転任した後も、農民運動の困難で複雑な問題を解決するために岡田に指導を仰ぐなど、密接なつき合いがあつた。ハンセン病に冒されて変わり果てた岡田の姿を目撃した太田は、彼に近づいて今の心境を尋ねる。すると「只これだけのことははつきりと今でも君に言へる。僕は身体が半分腐つて来た今でも決して昔の考へはすててはゐないよ」と答える。岡田はなおも非転向の立場を守り続けているのであつた。彼の生き方に畏敬と羨望を感じながらも太田は、その心境に到達

することができない。やがて肺病が悪化して重体に陥った太田は担架に乗せられて獄外に運び出される。看護夫が囚衣を脱がして新しい浴衣を着せたとき、「臙腫とした意識の底で、太田は本能的にその浴衣に故郷の老母のほひをかいた」。太田は刑の執行停止を宣告されるのだが、そこには転向寸前の人間の心理が象徴的に描かれている。

転向と非転向との間で揺れる太田の心理を島木自身のものと考え、「重病の肺患ゆえに転向しなければならなかったからこそ、島木は、自己とおなじ身体的条件の過酷な、癩や盲目の思想犯を通じて非転向者の心境を追究しようとした」とする大久保典夫氏の読みがある。作品から島木の「作者の激烈な再転向への意志」を感じ取る大久保氏の解釈は「一度は崩れおちながらもそれをいわば逆エネルギーとして再建をはかった島木の、主体的潜熱マタに由来する」という小笠原克氏の見解に通じる。また宮井進一や梅川などの証言にもあつたように、島木は出獄した後も政治活動に復帰しようとしていたのは確かであつて、高見順も「出獄と転向の間に古い闘争経歴のこの持主が謄写版運びというような仕事までして、『第一義の道』に復帰しようと苦しんだ一時期のあること」¹³を指摘している。

つぎに梅川がペンネーム・堀坂山行を使つて書いた「老人」——六八歳になる老人は息子・修が×××事件で検挙され懲役五年の判決を受けてから、修が釈放される日まで一日も長生きしようと考え酒も煙草も止める。狭い接見部屋で面会したのはもう一年前、彼一人のために家族中がどれほど苦しんでいるかを責め立てるつもりであつたのだが、口を衝いて出たのはいたわりの言葉であつた。それに応えて修は「私のやつたことは正しいと確信してをります」という。そのときの

息子の態度は「今まで肩に手をかけてさすつめてやつた老人を、ぐんと突き飛ばし、一足すざつて冷然と見下ろす近より難い情ない気持」にさせた。なぜそのような言葉を父に投げつけたのか、修が弟に宛てた手紙にはその理由が記されていた。

世間的に賢く利巧に立ち廻り苦勞しわれくを育て、くれた一個の世間人たる父が、自分に何を求め、どんな態度に出ることを期待していたかを知らないほど自分は馬鹿ではない。だからこそ、惨酷だとは思つたが、敢て言つた。其の場限りの出まかせを言つて、一時的に父を安心させ欺くことが恐ろしい。若し父が、母や家の者のことを考へない不遜なものだと言つて怒るなら、俺はその怒りを甘受する。今の自分には安価な満足を与へる欺きを敢てする勇気がない。いつか、真意が分つてもらえる日があることを確信してゐる。いつの日か？ 自分にも分らない。一日も早く将来させる方法は知つてゐても……

息子の態度を今では許容できる気がしている老人も、家族中が世間の冷たい視線を浴びているのに気付くと腹立たしさを感じざるを得ない。農民運動や水平社運動に関わる人々が訪ねてくれたり、無産派の市会議員・西尾が励ましの言葉を掛けてくれる。非転向で獄中にいる息子を支える家族、そして支援者の人々の姿が登場し、修の心理を梅川自身のものと考へて読むことを可能にさせる。

「老人」の末尾には「一九三五・一一・二二」とある。父と息子との葛藤を描いた中野重治の「村の家」は同年五月に発表されている。

梅川もおそらく自らの体験を素材として獄中小説の執筆を試みたのであろう。当時梅川は松阪市平生町で古書店を営みながら社会運動に従事していた。実父で老人のモデル・辰蔵は三十九年一月二日まで存命であり、息子の出獄を迎えることができたのである。三三年二月、松阪では市制実施に伴って市議員選挙が行われた。無産派からはそれまで町議会議員を務めていた上田音市、松村政造、小林勝五郎の三名が立候補したのだが、全農全会派三重県協議会や松阪失業者同盟の支持にも関わらず当選者は上田だけであった。小説に登場する無産派の市会議員・西尾のモデルを特定することは難しいが、梅川の郷里には彼を支援する人々のグループが存在していた。

文学に関心のあつた梅川はナルプ解散後、新井徹・後藤郁子夫妻を中心にして小熊秀雄や遠地輝武、田木繁、鈴木泰治ら若き詩人たちが集まった「詩精神」の同人となつて、詩や評論を発表していた。四一年一二月、アメリカに対して日本が宣戦布告した翌日の九日、非常措置にもとづいて三重県内では、梅川や野口健二、駒田重義、松井久吉らが検挙されるが、「特高月報」(昭和一七年八月分)には梅川の犯罪事実として「昭和九年至昭和十年約一年間、東京市前奏者^{マユ}発行の『詩精神』及伊勢新聞記者渡辺光二発行の『三重文学』等に堀坂山行のペンネームを以て『闘士』『老人』等を掲載して労働者農民の階級意識昂揚を図り」とある。足かけ二年のわずかな期間しか創作活動は行われていなかったが、梅川の作品は警察の監視対象になっていたのである。

島木の「癩」を読んで「ほんものだ」と唸つたように梅川は非転向者でありながら転向者の心理を理解した。政治的信条の存否で作品を

判断するのではなく、過酷な情況に置かれた人間がどのような行動を取るか、その心理を追体験させるリアリズムの強さによつて作品の是非を問うことができる、これが本当の文学的な価値観といえるものであろう。自ら作品を執筆する場合も、あるいは他者の作品を批評する場合も、このような価値観を内在させた資質を備えてこそ優れた成果を上げることができる。その意味からすれば島木の小説を評価できた梅川は、転向／非転向の規準を越える想像力を持った、文学活動の面においても「第一義の道」を歩んだ文学者と呼ぶにふさわしい。但し梅川の「老人」は決して優れたものとはいえないが、父との心理的葛藤を主題として描いた点では、ナルプ時代のプロレタリア小説とは一線を画する作品であり、また非転向者の心理を扱った点では、当時数多く発表されていた転向小説のなかでも異色といえる作品であつた。

結

着替えの浴衣に老母の匂いを嗅いだ太田と老父を冷然と見下ろす修。昭和のプロレタリア文学者たちが均しく遭遇した(血と宿命)の問題を島木と梅川とは、対照的に描いたといえよう。もちろん「おそらく、転向過程を、分析的に客観的に描きだしたのは、島木健作が唯一ではないか」(大久保典夫氏)と高く評価された「癩」と、中央文壇からは一顧だにされなかった「老人」とを同列に論じることにはできない。しかし日農県連書記として農民運動の最前線で活動し、大阪刑務所でも斜め向かいの獄室で服役するなど、経歴の上では両者の共通点が多い。「癩」のなかで、非転向のハンセン病患者・岡田に対して

注がれていたのが「畏敬と羨望」の眼差しであったことに「作者の激烈な再転向の意志」が読み取れたように、島木は文学活動に転じながら表現のリアリズムを通して「第一義の道」を歩もうとしていた。他方、岡田のモデルとされた宮井進一や三宅右市と同じく梅川も政治活動において「第一義の道」を歩み続けた人間であり、それと同時に、創作に費やされた時間は短いものであったが、文学活動においても転向／非転向の規準を越えた自己の価値観に従ってつねに自他の作品に接していた非転向の文学者といえよう。三・一五事件当時の獄中体験を梅川はつぎのように回想している。

独座面壁、囚人と云うものは、記憶ばかりをくつて生きているものである。この様な渦巻く社会から隔絶された環境におかれた時にこそ、人はまつたく、云いわけや強がりやぬきにして、うぶな謙虚さをもつて、過去の自分にたちむかえるものである。私もまた、投獄されるまでの、自分のやり口を巨細に検討し、自己批判をつづけた。つづけながら、いかに機械的で、粗雑生硬なものであつたか、と顔を手で蔽いたく、又思わず赤面することもしばしばであつた。私は、この、ながい自己批判の成果の上に、どんと尻をおちつけて、農民組合運動を、も一度やり直したかつた。

（「島木健作の思い出」）

右の引用のなかで梅川は冷静に往時を振り返って記述しているが、実際は五年も拘禁状態に置かれて多大な精神的苦痛を強いられていた

はずである。「癩」の太田も精神衰弱が激しくなり心悸亢進などの症状が表れていた。治安維持法による拘禁精神病 (Detention psychosis Hapsychose) を研究している秋元波留夫氏によれば、思想犯の囚人のなかには「陽性症状を呈して急性に発病する分裂症に酷似¹⁴」した症状を訴える者たちがいたという。拷問による身体的・肉体的苦痛はいうまでもなく、自分の信念と肉親への情愛との葛藤、将来への不安など複合的な要素が原因となつて、拘禁されて半年後、重度の心的外傷後ストレス障害 (post-traumatic stress disorder) を引き起こすことがある。具体的には「感覚脱失、運動麻痺、けいれん発作のようなヒステリー症状 (身体表現性障害)、あるいはガンザー症候群 (仮性痴呆)、道化症候群、昏迷などの解離障害、反応性躁状態、無罪妄想、好訴妄想¹⁵」などの障害が発生している。

人権が封殺されていた時代、人間の解放を求めて闘った作家達が妥協と変節を迫られながらも幾度も態勢を立て直し「第一義の道」にとどまり続けようとした足跡には、今なお検証の余地が残されているといえよう。

注 本論文は拙稿「梅川文男研究(1)―プロレタリア詩人、堀坂山行の軌跡―」(「人文論叢」第一八号、二〇〇一年三月)、「プロレタリア詩人・梅川文男(堀坂山行)とその時代―松阪事件に至るまで―」(「三重大学日本語学文学」第一二号、〇一年六月)、「梅川文男研究(2)―プロレタリア詩人、堀坂山行の淡路時代―」(「人文論叢」第一九号、〇二年三月)、「プロレタリア詩人・梅川文男(堀坂山行)とその時代(二)―三・一五事件に至るまで―」(「三重大学日本語学文学」第一三号、〇二年六月)の続稿である。

また拙稿「プロレタリア詩人―梅川文男のこと」(「学塔」第一〇六号、

三重大学附属図書館報、二〇〇〇年一〇月)、「小津安二郎の中学生時代・仄聞」(「三重シネマレター」創刊号、〇一年五月)も合わせてご覧いただきたい。

なお引用文中、今日の人権意識に照らして不適切と思われる表現が見られるが、歴史的背景を知るための資料として修正を加えずにそのまま引用した。

- (1) 引用記事中、労働農民党候補者・近内金光の名前は原文では伏字に
なっている。
- (2) 『労働農民党』第四卷(一九八五年六月、法政大学出版局、二七〇頁)
- (3) 『転向文学論ノオト』(「現代文学序説」創刊号、一九六二年一〇月、
九頁)
- (4) 「島木健作君について」(「文学評論」第一卷第二号、三四年四月、ナ
ウカ社、一二九頁)
- (5) 「三宅右市のこと」(『兵庫県党のあゆみ』、一九七二年七月、日本共
産党兵庫委員会、一二三〜一二四頁)
- (6) 『昭和文学盛衰史』下巻(一九五八年一月、文藝春秋新社、一六八
頁)
- (7) 「島木健作と私 党および農民運動を背景として」(「現代文学序説」
第四号、一九六六年五月、一三頁、落合書店)
- (8) 『農民運動史研究会『日本農民運動史』(一九六一年四月、東洋経済新
報社、三一九頁)
- (9) 『三重県水平社労働運動史』(一九七七年八月、三一書房、二二二頁)
- (10) 前掲(8)、六五〇頁。
- (11) 「島木健作ノオト(三)―転向文学論(その二)―」(「文学者」、一九六
〇年一〇月、七〇頁)
- (12) 『島木健作』(一九六五年一〇月、明治書院、五〇頁)
- (13) 『昭和文学盛衰史』上巻(一九五八年三月、文藝春秋新社、二七一頁)
- (14) 『実践精神医学講義』(二〇〇二年二月、日本文化科学社、七七五頁)
- (15) 同右書、七七七頁。

(おにし やすみつ、三重大学人文学部助教授)